

山雄 健次, 須山 正文, 真口 宏介 (編)

画像所見のよみ方と鑑別診断 胆・膵

竜 崇 正

(千葉県がんセンター)

診断を体系づけるのが非常に困難な胆・膵疾患診断に待望の書が出版された。現在最も油ののっている消化器内科医である山雄健次、須山正文、真口宏介三氏の編集によるものである。三氏とも切れ味鋭い論理的な診断を展開している臨床医である。ただ多くの検査を投入して診断を進めるのではなく、必要最小限の診断法を組み合わせ、いつも患者の身になって親切丁寧に診断を進めていく臨床医である。各種診断法から得られた画像はどのような病理所見によって描かれたのかを常に検証している「画像診断プロ」とも言える存在である。本書はそのような「画像診断プロ」が熱く議論を戦わす場である「日本消化器画像診断研究会」で発表された貴重な症例が満載されている。疾患ごとに診断のポイントを整理してまとめているので、読者にとっては非常に参考になると思われる。

病理所見との徹底的対比の中か

ら得られた診断体系を呈示しているので、病変の形と性状から画像の特徴を整理し、それを根拠に選択すべき検査法を呈示している。

まず病変が限局性かびまん性かで分類する。胆嚢病変では、限局性病変が隆起しているのか、壁肥厚しているのか、隆起性であれば有茎か無茎か広基か無茎かを診断し、その隆起病変が可動性か、表面の性状はどうか、に注目して分類している。

胆管病変では、狭窄所見と陰影欠損像、拡張胆管壁の性状をみる。そして狭窄の形がV字かU字か片側性か多発かをみる。陰影欠損像や透亮像では、これに表面の性状を加味して分類がされている。

膵病変では、限局性病変が、充実性か嚢胞性か充実性と嚢胞性の混在かをみる。そして充実性では辺縁の性状が整か不整かをみる。嚢胞では形が類円形か凹凸か、また単房か多房かをみる。これに主膵管の狭窄像や拡張像、内部透亮

像に注目して分類されている。

これらの形状分類に、超音波画像でのエコーレベル、CTでの血流評価や、MRIの所見などから確定診断がえられる。そしてそこに病理組織所見が対比されているので、読者は「なるほどこの病理所見だからこのような画像になるのだ」と納得することができる。診断に迷ったときは原点に戻って、画像をじっくりよく眺め、病変の形と性状から病理所見を頭に描きながら診断を進める大事さを教えてくれる。

さらにうれしいことには、40数種の重要な疾患の説明をコンパクトにまとめたColumnである。近年変遷する疾患概念を整理してあるので、例えばIPMNとMCNの違いもこのColumnを読むとよく理解できる。その目でもう一度症例をじっくり振り返ると、さらに疾患がよく頭に入るような心憎い構成である。

本書を手にとると、一例一例の積み重ねがどんなに大事かが理解できるであろう。消化器疾患に携わるすべての人に読んでいただきたい名著として推薦する。

●B5/頁 336/2006年/定価 15,750円(本体 15,000円+税 5%)
[ISBN978-4-260-00071-0] 医学書院 刊